

何を目指すのか

加藤 享

〔聖書〕 士師記2章6～19節

ヨシュアが民を送り出したので、イスラエルの人々は土地を獲得するため、それぞれ自分の嗣業の地に向かった。ヨシュアの在中にはもとより、ヨシュアの死後も生き永らえて、主がイスラエルに行われた大いなる御業をことごとく見た長老たちの存命中、民は主に仕えた。

主の僕、ヌンの子ヨシュアは百十歳の生涯を閉じ、エフライムの山地にある彼の嗣業の土地ティムナト・ヘレスに葬られた。それはガアシュ山の北にある。その世代が皆絶えて先祖のもとに集められると、その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った。イスラエルの人々は主の目に悪とされることを行い、バアルに仕えるものとなった。彼らは自分たちをエジプトの地から導き出した先祖の神、主を捨て、他の神々、周囲の国の神々に従い、これにひれ伏して、主を怒らせた。彼らは主を捨て、バアルとアシュトレトに仕えたので、主はイスラエルに対して怒りに燃え、彼らを略奪者の手に任せて、略奪されるがままにし、周りの敵の手に売り渡された。彼らはもはや、敵に立ち向かうことができなかった。出陣するごとに、主が告げて彼らに誓われたとおり、主の御手が彼らに立ち向かい、災いをくだされた。彼らは苦境に立たされた。

主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された。しかし、彼らは士師たちにも耳を傾けず、他の神々を恋い慕って姦淫し、これにひれ伏した。彼らは、先祖が主の戒めに聞き従って歩んでいた道を早々に離れ、同じように歩もうとはしなかった。主は彼らのために士師たちを立て、士師と共にいて、その士師の存命中敵の手から救ってくださったが、それは圧迫し迫害する者を前にしてうめく彼らを、主が哀れに思われたからである。その士師が死ぬと、彼らはまた先祖よりいっそう墮落して、他の神々に従い、これに仕え、ひれ伏し、その悪い行いとかたくなな歩みを何一つ断たなかった。

〔序〕 アブラハムからヨシュアまで

9月になりました。今月の聖書の学びは、旧約聖書の士師記です。イスラエルの民の先祖アブラハムは、文明の発祥地の一つといわれるメソポタミア地方から、紀元前 2000 年ごろ、神に導かれてパレスチナ地方に移住しました。

紀元前 1700 年頃、ひどい飢饉に見舞われたアブラハムの子孫ヤコブ一族は、食糧を求めてエジプトに避難しました。そして 400 年後に、モーセを指導者にエジプトから脱出します。これが出エジプトの出来事で、旧約聖書では第二番目の書出エジプト記から、第五番目の書申命記までに記されています。モーセの時代の特色は、荒野を移動する40年の旅の間に、神の民として神から十戒に代表される律法を与えられ、その信仰を明確に確立させたことです。

モーセは、目的地を目の前にして死に、ヨシュアが後継者として立てられました。イスラエルの民はヨシュアの指揮の下に約束の地カナンに侵入し、そこに定住するようになりました。紀元前 1250 年頃といわれています。それからサウル、ダビデ、ソロモンと続くイスラエル王国の時代が始まる紀元前 1020 年までの間の約 200 年余が、旧約聖書のヨシュア記、士師記の時代です。

「乳と蜜の流れる地」(出エジプト記 3:8)と表現される肥沃なヨルダン川、キシオン川流域の農作地帯には、当然ながら先住民たちが、豊かな暮らしをしていました。そこへエジプトを脱出した遊牧の民イスラエルが侵入して来て、定住しようとしたのです。当然、大きな摩擦と混乱が生じました。

ヨシュア記によると、イスラエルの民はヨシュアの下に一致団結して一気に征服し、12部族に土地が分配されて定着したとなっています。しかし士師記によると、ヨシュア記とは対照的に、各部族ごとにばらばら侵入して行ったので、先住民を追い出すことができなくて、一緒に暮らす地域の方が多かった。特に平野地域はそうだったと記されています。恐らく士師記の記述の方が、事実在即していたと思います。

[1] 堂々めぐりの愚かさ

士師記は「ヨシュアの死後」という言葉で書き始められています。そして今日の聖書の箇所2章6節以下には、士師記がどのような書であるかが、実に明瞭に記されています。

ヨシュアが110才で死に、ヨシュアと同世代の人々も死ぬと、エジプトを脱出した民にカナン之地をお与えになった、神の大いなる御業を知らない世代になりました。すると土着の豊かな農業文化の影響を強く受けて、信仰までも変わり始めたのです。農業神バアルとその配偶神アシュタレト(アシェラ)に手を合わせて豊作を祈り求める人々が出てきました。

そこで、彼らをエジプトから導き出した主なる神は、手を引いてしまわれました。神の守りがなくなったため、イスラエルの民は略奪者に襲われても勝つことが出来ず、せっかく得た収穫を略奪されるままになりました。神は、圧迫し迫害する者を前にして苦しむイスラエルの民をあわれに思われて、士師を立てて略奪者の手から救い出して下さいました。ところが「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」で、士師が死ぬと、民はまた墮落して他の神々にひれ伏し、仕えるようになります。神は再び手を引いておしまいになり、民は略奪者に苦しめられるという繰り返しとなりました。士師記には12名の士師が登場します。

士師記を読んで先ず感じることは、イスラエルの民が同じことを繰り返す堂々めぐりの愚かさです。どうしてこの民は経験から学んだ所に、賢く立ち続けられなかったのでしょうか。どうして自らが苦境に陥る愚かさを繰り返したのでしょうか。

豊かな農業文化の影響を強く受けて、アブラハム以来、彼らを一貫して導いてこられた真の神から離れてしまう——それがイスラエルの民の現実だとするならば、そもそもカナン之地に定着すること自体が、間違っていたのではないかとすら、思ってしまう。

モーセもカナン之地を目前にして死ぬ時に、民の将来に強い危機感を持ち、こう語っています。「わたしは分かっている。わたしの死んだ後、あなたたちは必ず墮落して、わたしの命じた道からそれる。そして後の日に災いがあなたたちにふりかかる。あなたたちが、主が悪と見なされることを行い、その手の業によって、主を怒らせるからである」(申命記31:29)。

ヨシュアも死を前にして、同じ危機感を抱いていました。「あなたたちは主に仕えることが出来な

いであろう。この方は聖なる神であり、熱情の神であって、あなたたちの**背きと罪**をお赦しにならないからである。もしあなたたちが、主を捨てて外国の神々に仕えるなら、あなたたちを幸せにした後でも、一転して災いをくだし、あなたたちを**滅ぼし尽くされる**」(ヨシュア記 24:19～20)。

その時イスラエルの人々は、ヨシュアに**三度も**繰り返し誓いました。「いいえ、わたしたちは主を礼拝します」。しかしヨシュアが死ぬと、**墮落と立ち直りとの繰り返し**に陥ってしまったのです。「イスラエルの人々は、**またも**主の目に悪とされることを行った」という言葉が、士師記には繰り返し記されています。

神はこのような民を、どうしてカナン(現在のイスラエル)の地に導き、住ませようとされたのでしょうか。私たちは今日、ここから**何を学び取るべき**なのでしょうか。

[2] 土地に執着する心の闇

モーセは、400年過ごしたエジプトを脱出してカナン(現在のイスラエル)の地へ移住することを、こう理解しました。「神は昔、私たちの先祖アブラハムを、ウル(現在のイラク)の地からカナン(現在のイスラエル)に導いて、**この地**をお前とその子孫とに与え**るとお約束**になった。神はその約束を忠実に果たそうとして、我々をお導きくださっているのだ。ですから**約束に忠実な神**に対して、誠実に応答していくことこそ、自分たちの最も大切にしなければならない**行動原理**だと、心に深く受けとめたのです。

「**あなたのみが私の主なる神**です。あなた以外の他のものに心を寄せ、それにひれ伏すようなことはいたしません」と約束した以上、自分たちも**その約束に誠実であるべき**です。それを破ることは、自分自身が崩れていく**自滅行為**に外ならないのです。

神の真実な愛に対する裏切りですから、士師記は他の神々を礼拝することを「**姦淫**」(2:17)と表現しています。ですからイスラエルの民のこの不誠実さが、彼らを苦境に立たせる**根本原因**にほかなりません。このようにモーセやヨシュアの**強い警告**から始まった士師記の歴史でありながら、イスラエルの民が、略奪者に苦しめられる経験を繰り返し、それでもなお主なる神に対する真実の信仰の応答を、続けることが出来なかったのは、何故でしょうか。

私はそこに「**土地に執着する心の闇**」を見る思いがいたします。私たちは「**一生懸命**」とよく言います。しかし辞書をご覧ください。「**一所懸命**」が本来の言葉だと解説されています。昔の武士たちが自分の領地をめぐって、僅かな土地の所有にも命を懸けて争った、という人間の現実を表す言葉なのです。

農業に適した良い土地は、豊かな収穫を生み、物質的豊かさをもたらしてくれます。その豊かさが悪を誘発します。**利益の誘惑**が、私たちの**誠実さを崩していく**のです。**土地に執着**することは危険です。そこで新約聖書へブライ人への手紙は、**アブラハムがなぜ信仰の父**なのかを、こう語ります。

「信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして**約束の地に住み**、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に**幕屋**に住みました。アブラハムは、**神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望**していたからです」(11:9~10)。

アブラハムは、神からお前と子孫に与えると約束された土地カナンに導かれましたが、そこに暮らしやすい良い家を建てて、豊かな毎日を送ろうとはしませんでした。**天幕生活**という仮住まいの生活で満足したのです。どうしてでしょうか。それは彼が、この地上の生涯のその先に、**神が天に備えて下さっている堅固な都**を見つめていたからにはほかなりません。ですから**アブラハムは、土地に執着する心の闇**から自由に生きることができました。カナンの豊かな農地に執着して、豊作・利益を求めて他の神々を拝み、アブラハム以来、彼らを導いて下さって居る主なる神に対する誠実さを失ってしまう人々と、アブラハムとの違いが、そこにあったのでした。

[結] 死とその後

約束の地カナンにたどり着いたイスラエルの民は、先住民を追い出せないのなら、自分たちの方が彼らの暮らしに溶け込んで、**農地がもたらす豊かさ**にあずかろうと思ひ、先住民が拝んでいる**農業神バアルとアシュレト**を拝む仲間入りをしてしまいました。

この世の多くの人々が**神社やお寺参り**をする**動機**は何でしょうか。無病息災、家内安全、商売繁盛、それに加えて、合格祈願、交通安全等でしょうか。でも私たちのこの世の人生は、長くてもただかだか**80年、90年**です。原爆二発をくらって降伏してからでも、もう72年過ぎてしまいました。ではこの世の生涯を閉じた**その後**、私たちはどのようになるのでしょうか？

死亡届が出されます。「死んで亡くなる」確かにこの社会からは居なくなります。でも**私という存在**そのものが、亡くなってしまうのではありません。違います。聖書では、死は**眠り**と記されています。眠りには**目覚め**の時があります。そうです。世の終わりにキリストが再び天から来られ、**墓を開いて**、一人一人を**起こして**下さいます。そしてどのように生きたかを問われるのです。

私が行った罪の一切、我が身を守るために人を傷つけ、苦しめ、悲しめた罪の一切が問われるのです。その時には、神社やお寺のお札は、全く役にたちません。しかしキリストの**十字架の血**による**罪の清め**を信じる告白が出来る者は、罪を清められた者として、**神の都、天国**に迎えられます。

今日はこれから**主の晩餐式**を守ります。弟子たちとの最後の晩餐で、主は**パン**を裂いて弟子たちにお与えになりました。「これはあなた方のための**わたしの体**である」。杯をもお与えになりました。「この**杯は、わたしの血**によって立てられる新しい契約である」。そうです。**イエス・キリスト**は十字架の上でご自分の体を裂き、血を流して死んで下さいました。**私の罪の裁き**をご自分が引き受け、私に代わって死んで下さったのです。

このようにまでして、私を救おうとする御自分の**真実の愛**を、神は現して下さいました。この神の愛に、私も**真実に**応えて、信仰を言い表わして生きていかなければなりません。イスラエルの民は土地に執着する心の闇で、崩れていきました。様々な利得への誘惑がもたらす**心の闇**が、神に対する私の誠実さを崩していきます。そして自分自身も崩れていくのです。

私たちは、神の真実な愛を、十字架に於いてはっきりと現してくださっているイエス・キリストを**自分の救い主**と信じる信仰を与えられました。私たちの人生は、この地上の生涯で終わりではありません。世の終わりに、キリストと共に、天の御国に連れて行っていただけるのです。

礼拝の度毎に信仰を新たにして、アブラハムと同じ様に、天の御国を何時も待望しつつ、誠実な信仰の歩みを進めてまいりましょう。

祈ります：天にまします私たちの父なる神さま。あなたはイエス・キリストを十字架につけてまでして、私たち一人一人への**真実の愛**をお現しく下さいました。心より感謝いたします。アブラハムは、あなたから約束の地を与えられましたが、家を建てて住まおうとはせず、生涯を幕屋住まいで送りました。あなたのいましたもう天の都に住む日を目指していたからです。私たちもあなたの御国、天の都に迎えられることを、何にもまして望む者にして下さい。私たちは様々な悪の誘惑の中で生きております。あなたが私たち一人一人の心に語りかけて下さる命の言葉に、聞き従う歩みをさせてください。かけがいのない命を殺し合う戦争を止めさせてください。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。 アーメン